



The Japanese Red Cross Society of Nursing Science

Vol.10, 2012.

日本赤十字看護学会

日本赤十字看護学会ニュースレター 第10号 2012年12月発行

# NEWS LETTER



赤十字は物質的な動機を持たず、何か利益を得ようとする欲望によってではなく、人間への愛により突き動かされる。

解説赤十字の基本原則 人道機関の理念と行動規範 より  
(ジャン・ピクテ著, 井上忠男 訳, 第2版, p94, 東信堂)

## 理事長挨拶



日本赤十字看護学会 理事長 守田 美奈子

国内外での自然災害や社会変動、変革など様々な揺らぎが起こっておりますが、会員の皆様におかれましては、それぞれのお立場で看護専門職としてご活躍のこととお喜び申し上げます。

平成24年6月に長野県立看護大学で行われました第13回赤十字看護学会学術集会・総会で、本学会の創設期から数えて第5期目にあたります新理事が発足致しました。学会の創生期を率いて来られた樋口康子先生、第3期の新藤幸恵先生、そして第4期の濱田悦子先生と、これまでの理事長及び理事の先生方のご尽力のもとで、本学会は今日まで発展を続けて参りました。これまでの理事の先生方の理念を継承すると同時に、会員の皆様の要請や時代のニーズに即して、さらに学会を発展させその理念を実現化できるよう努力することが新しい理事会の責務だと考えております。

本学会は赤十字に関わる看護職の実践、教育、研究活動を学術的に探求し、看護を発展させることを通して社会に寄与するという理念で活動を行っております。

ご承知のように2011年3月に発生しました東日本大震災では様々な医療福祉活動が展開されました。看護においても災害看護の重要性と共に赤十字の看護活動の重要性も再認識されました。各地で為された災害救護・看護活動は各学会等で報告され多くの学びを看護職に提示しています。さらに今後も続く長期支援を通して、急性期以降の新たな看護の方法や課題が、これから徐々に明らかにされていくのではないかと思います。現地の早期の復興に寄与するためにも看護の力を結集し、その学びを学術的なものにして看護職や一般市民の方々と共有し、今後の発展に向けていく必要があると思います。そのためにも本学会の役割は大きいと考えています。

また、人々の健康を守るためには、災害発生時の医療や看護だけではなく、災害発生を視野に入れた防災・減災体制、平時の時の看護を見直す必要に迫られています。病院内や病院間連携、在宅でのケア体制、病院も含めた地域コミュニティの形成など、医療や福祉、地域行政などの組織が繋がりが合い、途切れることのないケアや医療の提供体制を地域で整えていくこと、それらの重要性を改めて教えてくれています。

本年6月に長野で開催されました赤十字看護学会では、阿保順子先生（長野県立大学学長）が、「臨床看護のグランドデザイン」というテーマのもと臨床看護の在り方を捉え直すことの意味を会長講演で示唆されました。赤十字は実践を重視してきました。その視点から、それぞれの日常臨床での看護実践の在り方を検討し、看護実践と教育や研究との繋がりを見直していくことも本学会の重要な役割だと、改めて感じさせられました。

看護赤十字看護学会として取り組む課題はたくさんあると思われれます。それらの活動の核となり学会活動を導いていく理念は「人道（ヒューマニティ）」です。赤十字は「人道」という理念のもと、人々の痛みや苦しみに寄り添い、人間の尊厳を守ることを大切にして実践しております。災害の時だけでなく、平常の看護も含めて、様々な状況下における看護実践の質を高め、国民に寄与していけるよう、本学会での活動を充実、発展させていきたいと考えております。

看護の学会も30以上と発展しておりますが、本学会の特徴や役割をさらに明確にすべく、今後も学会活動の充実に向けて新理事の先生方と共に協力しあい、皆様方のご期待に添えるよう努力してまいりたいと思います。今後とも、学会へのご理解やご協力を引き続き賜りたく、よろしくお願い致します。

## 平成24年総会にて、以下の新理事・新評議員が承認されました。

(五十音順)

理事長 守田美奈子 (日本赤十字看護大学)
副理事長 川嶋みどり (日本赤十字看護大学)
理事 阿保 順子 長野県看護大学
井部 俊子 聖路加看護大学
浦田喜久子 日本赤十字社
河合 利修 日本赤十字豊田看護大学
川嶋みどり 日本赤十字看護大学 (副理事長)
黒田 裕子 北里大学
佐々木幾美 日本赤十字看護大学 (指名理事)
田中 孝美 日本赤十字看護大学 (指名理事)
寺門とも子 日本赤十字九州国際看護大学
原 玲子 宮城大学
本田多美枝 日本赤十字九州国際看護大学
守田美奈子 日本赤十字看護大学 (理事長)
監事 前田久美子 日本赤十字社幹部 看護師研修センター
村松 静子 在宅看護研究センターLLP/ 看護コンサルタント株式会社

評議員名簿 (任期：平成24年総会～平成27年総会)

氏名	所属
赤塚あさ子	日本赤十字社幹部看護師研修センター
阿保 順子	長野県看護大学
雨宮多喜子	佐久大学
飯村 直子	首都大学東京
井部 俊子	聖路加看護大学
今泉 正子	仙台青葉学院短期大学
上野 富衣	北見赤十字病院
梅崎 淳子	福岡赤十字病院
浦田喜久子	日本赤十字社
大島 弓子	京都橘大学
大和田恭子	日本赤十字社医療センター
尾山とし子	日本赤十字北海道看護大学
樺山たみ子	学校法人 日本赤十字学園
河合 利修	日本赤十字豊田看護大学
川嶋みどり	日本赤十字看護大学
川西 美佐	日本赤十字広島看護大学
黒田 裕子	北里大学
児玉真利子	旭川赤十字病院
小西美智子	岐阜県立看護大学
小林 洋子	日本赤十字豊田看護大学
小松 智子	京都第一赤十字看護専門学校
小宮 敬子	日本赤十字看護大学
坂口 千鶴	日本赤十字看護大学
庄野 泰乃	徳島赤十字病院
関谷由香里	国立大学法人愛媛大学大学院
高岸 壽美	日本赤十字社和歌山医療センター
高橋 高美	柏原赤十字病院
田中 孝美	日本赤十字看護大学

(五十音順)

氏名	所属
力石 陽子	日本赤十字社医療センター
筒井真優美	日本赤十字看護大学
寺門とも子	日本赤十字九州国際看護大学
永井真由美	広島大学大学院
中野 玲子	京都第一赤十字病院
中村美知子	山梨大学
畠山 悦子	元長野赤十字病院
原 玲子	宮城大学
平澤美恵子	元日本赤十字看護大学
平山恵美子	天使大学大学院
本田多美枝	日本赤十字九州国際看護大学
前田久美子	日本赤十字社幹部看護師研修センター
松井 和世	伊勢赤十字病院
松田日登美	KKR 東海病院
松近 昌子	大阪赤十字看護専門学校
間淵 元子	伊豆赤十字病院
宮坂佐和子	諏訪赤十字病院
宮堀 真澄	日本赤十字秋田看護大学
村田 由香	日本赤十字広島看護大学
村松 静子	在宅看護研究センターLLP/ 看護コンサルタント(株)
守田美奈子	日本赤十字看護大学
柳 めぐみ	姫路赤十字看護専門学校
山岡ふき子	秋田赤十字病院
山根 恵子	唐津赤十字病院
山本 美紀	日本赤十字北海道看護大学
若林 稲美	武蔵野赤十字病院

## 編集委員会



編集委員会 委員長 黒田 裕子

今期、日本赤十字看護学会誌の編集委員会担当理事をさせていただくことになりました。本田多美枝理事とともに編集委員会活動を一層推進させていきたいと考えております。会員の皆様のご支援・ご鞭撻をなにとぞよろしくお願い申し上げます。

本会誌は投稿論文が他学会誌に比べてたいへん少ない状況です。赤十字の病院をはじめとして、全国にネットワークを持っている赤十字ですので、実践報告や事例報告など、より多くの投稿論文を口コミで是非ともご投稿をよろしくお願いいたします。また、赤十字の看護大学や大学院においても研究活動は盛んに行われているはずだと思います。学部卒業研究、修士論文、博士論文などの発表の場として活用していただければと思います。また、教員の方々も教育活動を熱心に行っていると思いますので、その日頃の成果をご投稿のほど、お願い申し上げます。毎年の学術集会では多くの発表が行われています。発表のみに終わらせず、誌上への論文化へと発展させていただけるように、よろしくお願いいたします。

編集委員会では少しでも質の高い会誌を維持させていくために、そして会誌から発信された知見が赤十字の看護実践・看護教育・看護研究の場に還元されていくように、一層編集活動に取り組んで参りますことをお誓いいたします。

以上、理事就任のご挨拶にさせていただきます。

### 編集委員

黒田 裕子  
江本 リナ本田多美枝  
谷津 裕子中木 高夫  
林 みよ子北 素子  
出口 祥子

## 研究活動委員会



研究活動委員会 委員長 阿保 順子

前回に引き続き、日本赤十字看護学会理事をお引き受けすることにしました。看護学はいま、いい意味でも悪い意味でも過渡的な状況に立っていると思います。アメリカに倣い、看護学を医学の下に位置づける階層的なものとして捉えるのか、あるいは医学と重なりながら、人間の生活にコミットする瀾漫的なものと捉えるのか、どっちに舵を切るべきなのでしょう。本年6月の第13回学術集会を開催し、私はそのことを、よくよく考えました。

日赤の看護教育には、看護の本質が凝縮された形で確かに存在していました。私たちは、その本質にあった、対象論から方法論、展開論を取り上げ、それを言葉にし、すべての看護職者に発信していかなくてはなりません。日赤看護学会の存在意義のひとつはそこにあると思います。いきなり次元が変わるほど飛躍しますが、日赤看護学会の根源的な責務は、全世界の人々の健康と安寧を支えることに貢献することです。そのためには、世界の現在をきちんと見据える必要があります。原発問題は、この世界の現状を映し出す鏡であるでしょう。世界は、市場原理による社会の徹底的な支配へと進んでいます。看護は、人と人の絆でできているこの社会の維持に貢献する最たる仕事です。人々の精神構造と、それを操作している仕組みまでをよくよく見通しながら、人々の置かれている現実を把握していかねばなりません。

研究活動委員

阿保 順子

寺門とも子

小川 里美

有賀美恵子

## 臨床看護実践開発事業委員会



臨床看護実践開発事業委員会 委員長 井部 俊子

このたび、日本赤十字看護学会の第5期の理事として、第2期に引き続き、第3期臨床看護実践開発事業委員会の委員長をお引き受けすることになりました。臨床看護実践開発事業委員会は、臨床看護実践の開発支援として、臨床に埋もれている看護の技を発掘すること、看護の技を検証すること、検証された看護の技を普及することを目的としています。この委員会は、平成17年に看護系学会等社会保険連合（看保連）が看護の立場から診療報酬体系及び介護報酬体系等の評価・充実・適正化の促進を目的とする組織として発足したことを機に活動を始めた委員会です。

今期は、高齢社会を迎えた我が国の「看護実践開発」として、「認知症高齢者のワンセットケアの確立と普及」をテーマに定め、活動を進めていきたいと考えています。

学会員の皆様には、認知症高齢者の看護ケア技術に関する情報提供並びに、研究活動推進へのご協力をお願いいたします。

臨床看護実践  
開発事業委員

井部 俊子  
松永 佳子

阿保 順子  
赤沢 雪路

川嶋みどり  
倉岡有美子

守田美奈子  
中村 綾子

## 国際活動委員会



国際活動委員会 委員長 河合 利修

日本赤十字看護学会には、看護と赤十字という二つの柱があります。当学会の会員のほとんどは看護師であり、看護の柱は非常に強固であると思います。他方、赤十字の柱はどうでしょうか。赤十字は、戦場で救護活動を行うために発生しました。軍隊の衛生部隊の一部として行われる戦時救護は今日、ほとんどなくなりましたが、戦争や災害で救護活動を行う赤十字は今でも健在です。しかし、「赤十字って何」という根本的な疑問を持たれる方は、一般の方々だけではなく、当学会の学会員でも多いのではないのでしょうか。

したがって、赤十字看護という場合、看護の重要性はもちろんありますが、赤十字の面から考えることも重要になります。このたび、国際活動委員会委員長の任に就いた小職は看護師ではなく、専門は国際法・国際人道法です。これまで、国際活動委員会は、学会における交流セッションにおける活動や、世界看護科学学会学術集会への参加など、当学会の国際的な活動の増進を行ってきました。そして、引き続き、当学会の国際的な活動を活発化させるのが、小職に与えられた任務と考えております。そして、その際、赤十字の国際的な側面が重要になると思います。

赤十字は、先ほど述べましたように、戦場から始まりました。もう少し具体的には、1859年のソルフェリーノの戦いにおいてアンリ・デュナンが傷病兵を救護し、その活動をもとにして、赤十字が発生しました。1863年に現在の赤十字国際委員会の前身にあたる組織が赤十字の最初の組織としてジュネーブに誕生して以来、世界各国に赤十字社（イスラム教国では赤新月社）が誕生しました。日本赤十字社も1877年に博愛社としてスタートし、1887年に名称を日本赤十字社と変更、現在に至っています。今、世界には187カ国に赤十字社や赤新月社が存在します。赤十字は真に世界的な運動ということができましよう。

このような歴史をもった赤十字は、これから150周年を迎えようとしています。いわば、「150周年ラッシュ」です。来年は、赤十字誕生150周年です。そして、ヨーロッパの国のいくつかの赤十字社が150周年を迎え、日本赤十字社も15年後には150周年を迎えます。このような長い歴史に培われた赤十字について、国際的な側面からは是非、掘り下げていきたいと思っております。国際活動委員会としましては特に、赤十字社のなかで看護活動を行っている赤十字社との交流をこれから活発化できれば、と思っております。

国際活動委員

河合 利修

杉浦美佐子

ソルスティンソンみさえ

東 智子

## 広報委員会

広報委員会 委員長 原 玲子

平成24年度より本学会広報委員会の委員長をお引き受けすることとなりました。

広報委員会は、ニュースレターの発行、学会ホームページの管理運用を中心に活動を行っております。ニュースレターでは、学会からの情報発信や会員の声等を紹介し、ホームページでは、迅速に、学会の活動を広く伝えることに加え、学会員間の双方向性を実現するためにコミュニケーションを活性化する取り組みを行っていききたいと思います。

また、広報委員が赤十字関連施設を訪問・取材し紹介する企画は、日本中の会員のニュースをお伝えすることを目指して、引き続き、取り組んでいきたいと思っています。

私は、現在、宮城大学に勤めておりますが、2011年3月11日に宮城県で東日本大地震を体験しました。あの震災の折には、全国赤十字の医療班の活動等を目の当たりにし、赤十字組織から一歩離れた立場で、赤十字の活動の素晴らしさに感動しておりました。あれから1年6カ月が過ぎ、被災地では、日々減少するボランティアや東北以外の地域での大震災に関する新聞やテレビの報道が日々少なくなっていることから、大震災の風化を懸念し、「被災地の今を知り、関心をもってほしい」と、被災地からの発信をテーマにさまざまな取り組みが始められました。また、この震災からの復興は、津波により失われた場と同じように生活の場を立ち上げることでないことが難しさのひとつとなっています。その被災者の中に、津波にさらわれ、その形を失った石巻赤十字看護専門学校があります。

本年度の広報委員会の訪問・取材活動として、この石巻赤十字看護専門学校の大震災からの新しい時代の新たな学校づくりという復興を記憶と記録に残す「広報」という形で、学会員の皆さまと一緒に、支援できればと考えております。

どうぞよろしくお願いいたします。

広報委員

原 玲子

菅原よしえ

杉浦美佐子

関 育子

竹内 貴子

## 災害看護活動委員会

災害看護活動委員会 委員長 浦田喜久子

本年度より、災害看護活動委員会を担当させていただくことになりました。

当委員会は、これまで、学会での交流集会やセミナー開催、災害時における研究活動など、活発に有意義な委員会活動がなされてきました。これからも、さらに積み重ねて、災害看護の発展に向けて努力したいと思いますのでよろしくお願いいたします。

さて、2011年は、東日本大震災が発災し、地震・津波による被害、そしてそれに伴う福島第一原子力発電所の事故による被害は甚大なものでした。改めて、被災者の皆様にお見舞い申し上げますとともに、この大災害に立ち向かい、これまでにない大規模な救護活動に従事されました皆様には、敬意を表したいと思います。

この震災で、日本赤十字社は、約6か月間の長期にわたって救護活動を行い、935班、6700人の医療従事者が活動しました。この数は、日本全国の医療従事者の救護班での活動者数の約56%を占めています。

今回の震災の特徴は、震災による外傷より慢性疾患患者が多く、また、軽傷者がほとんどでした。被災者は、インフラが充分機能しない避難所で、長期に不自由な生活を強いられることから、感染予防や健康管理、高齢者の生活支援、こころのケアのニーズが高い状況でした。これらのニーズに対応して、新たに、「看護ケア班」、「介護チーム」や「こころのケアチーム」が活動しました。

これまで、急性期を中心として救護活動を実施してきましたが、災害の種類や災害サイクルに応じた救護活動を充実させることが課題として明確になりました。

この委員会の活動目的は、「災害時の調査活動や学会・災害看護セミナー等を通して、災害看護に関する「経験知」を「形式知」として共有し、災害看護の発展に資する。」としております。赤十字看護学会等を通じて、これまでの災害体験や、またこれから対応する災害看護活動に研究を重ね、災害看護の実践や教育の充実を図っていききたいと思います。委員会のメンバーは、学会員の皆様とともに頑張っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

災害看護活動委員

浦田喜久子

小原真理子

前田久美子

小林 洋子

村木 京子

池田由美子

## 第4期 理事会の活動内容

元日本赤十字看護大学 前理事長 濱田 悦子

朝夕の冷え込みが厳しく感じられる季節になりました。

皆様、ご清祥にお過ごしのことと存じます。

平成24年6月には、第4期の理事・監事の任期が終了し、第5期の理事・監事への引き継ぎをしたところでございます。第4期の理事会では、各委員会活動や学術集会を通して、以下のような、様々な活動をしてまいりました。

### 1. 学会誌の発刊回数および質の高い論文の投稿に向けて

日本赤十字看護学会誌は年に2回発行しておりました。投稿論文数が少ないことや、博士論文や修士論文などの学位論文の投稿が少ないことが課題でございました。そこで、学会誌の発刊回数を年1回に減らし、経費を節減いたしました。また、修士論文や博士論文の投稿をちらしやホームページで呼びかけることにいたしました。その結果、学位論文の投稿が少しずつ増え、年に1回の学会誌は、質の高い論文を掲載することができました。

### 2. 会計監査の回数の検討

これまででは、年に1回の会計監査を行ってまいりました。より厳密にかつスムーズに監査を進めるために、中間決算と中間監査を行うこととして、年2回の決算と監査を実施してまいりました。

### 3. 東日本大震災に関する支援活動と交流会

平成23年3月11日に起きた東日本大震災に関連して、日本赤十字看護学会災害看護活動委員会は、被災地における健康・生活状況の把握と支援活動を企画し、現地に入りました。訪問先の方々と話し合いの内容を報告書にまとめ、学会ホームページを通してお知らせしました。また、第12回日本赤十字看護学会学術集会では、「東日本大震災における赤十字救護班の看護師の活動経験知と今後の課題」というテーマで交流集会をもちました。学術集会の2日間にわたり、「写真でみる東日本大震災被災地の被害状況、救護活動、被災者の生活」の写真展示を行い、参加者が東日本大震災の様子や支援について知る機会を提供しました。

日本赤十字看護学会臨床看護実践開発事業委員会は、「東北地方の文化と言語の研修会 - 高齢被災者支援のために」というテーマで、高齢被災者支援のための研修会を都内で開催しました。この研修会では、「高齢者とのコミュニケーションに役立つ会話」というシンポジウムが行われ、方言をつかった支援の大切さなどを伝えてまいりました。

以上のように、さまざまな形で、被災者の支援に日本赤十字看護学会を通して参加することができました。

私共は、この3年間、日本赤十字看護学会の変革と発展に寄与できるように努力してまいりましたが、学会員の皆様はどのような感想をお持ちでしょうか。残念なことに、日本赤十字看護学会の会員数は、漸減している状況でございます。退会の理由の1つに「退職」が挙げられていますが、退職をした皆様にも、引き続き学会員の一人として、学会を支えていただきたく存じます。若い力と熟練した力が合わさってこそ、学会は発展していくものと考えます。会員の皆様には、日本赤十字看護学会が益々発展していけますように、今後とも日本赤十字看護学会に忌憚のないご意見やご支援を賜りたく、よろしくお願いいたします。

今年もあと1ヶ月余りとなりました。私事で恐縮ではございますが、在職中、多くの方々とお会いし、皆様から多大なご支援をいただきましたことに、心からお礼申し上げます。

ご多忙の中、くれぐれもお身体に留意され、皆様の御活躍を祈念いたします。

## 石巻だより

石巻赤十字看護専門学校 関 育子

石巻と書いてイシノマキと読みます。古くは伊達政宗が慶長遣欧使節を派遣した月の浦は石巻湾であったし、世界三大漁場と言われる三陸沖からは新鮮な海産物をもたらされ、歴史的にも文化的にも豊かな沿岸の町でありました。内陸地では北上川の水路の恵みを受けた水田が、見渡す限り仙石線沿線に広がり、空は高くそびえて、夏は緑に秋は黄金色に一緒に染まる黒土の穀倉地帯でもあります。

私は田園の中にある石巻赤十字看護専門学校仮設校舎にいます。ここは稲作水田の中に忽然とそびえる五階建ての赤十字病院の、その敷地内にあります。職員室の窓からは季節ごとに化する稲穂の色や、背の高いガマ・アシが一斉になびく様子や、風の強い曇りがちの日には港からカモメが飛来して、風上に頭を向けて行んでいる姿を見ることができます。教員室の中では14人の教職員が立錫の余地のないほどに机を並べていますが、まるやかな石巻弁の会話が聞こえて、のどかで平和な日常の情景があります。

しかし、あの震災で自らも被災者でありながら、看護教員と80人の学生が避難所で救護に当たったエピソードは本当に有名になりました。一方では、被災した家屋の新築・修理に取り掛かれない状況や仮設住宅からの通勤などの目に見えない課題が多くあり、教員はそれでも授業や臨地実習には何事もなかったように明るい表情で職務を果たされています。彼女たちはみなこの学校の同窓生とのことと、副校長森岡先生によると、北上川河口近くにあった旧校舎には80年余の歴史と伝統が詰まっていたが、津波を受けて1階は水没し、学校の記録や図書室の本は流されてしまった。11月に校舎の解体工事が始まってから、壊されていく母校を見るのはとても辛いとお気持ちを述べられています。

現在のプレハブ校舎は幅30m、奥行き9m、高さ6mのグレーの箱です。縦3m、横1.8mほどのパネルの組み合わせでできています。教室と実習室を含めて床面積は839㎡に過ぎず、旧校舎の半分ほどに狭くなり、さらに情報室と図書室は数メートル離れた病院の仮設病棟に間借りをしています。階上の教室で授業が終わると机やイスの音が響き、学生の移動に伴って階下の教員室は建物全体が大きく揺れて、地震と勘違いするほどです。

卒業をひかえた3年生の高橋里奈さんと大内真知子さんは、ようやく自分たちの学校ができたのだからせいたくは言えないがと前置きして、学校内が過密で学生同士が静に会話のできる場所がないこと、グループワークや演習のできる部屋の少ないこと、ゆっくり学生らしく過ごす空間のないことを挙げてくれました。そして、あの災害に遭遇し教員と1・2年生の80人が、ともに3日間にわたり同じ時間を過ごし、同じ体験をしたことによって、通常では感じられなかった強い絆が生まれたと、遠くを見るような眼で語ってくれました。今年の3月11日には、気が付いたら旧校舎の前に集まって黙祷をしていたが、来春もそうなりそうだ、静かに話していました。

石巻の復興は遅々として進まず、学生の学習環境は劣悪です。中でも8000冊以上あった蔵書は流されてしまい、全国から2000冊余の寄贈をいただいた図書を学習に活用しています。新校舎の竣工に伴って、2014年度には蔵書を増やす予定ですが、今後2年間は学生たち120人がこの環境下でケーススタディ、カンファレンス、課題学習を続けなければならない状況にあります。このような時だからこそ、豊かな物語の世界に浸り、目の覚めるような美術に触れ、心を楽しく遊ばせることが必要なのです。たとえ被災してもプレハブ校舎でもそれは可能だと信じて教員は日々チャレンジしています。写真は左から、高橋さん、大内さん、大橋教員です。



## 「第13回日本赤十字看護学会学術集会を終えて」

第13回日本赤十字看護学会学術集会大会長  
長野県看護大学 阿保 順子

2012年6月26日・17日、長野県看護大学におきまして第13回日本赤十字看護学会学術集会が行われました。『臨床看護のグランドデザイン』という大風呂敷を広げ、多少雨にも祟られましたが、学生を含め400人という参加者を得て、盛会でありましたことをご報告申し上げます。

本学会は、長野県看護大学のみではなく、長野県内の日赤病院、または本学の実習病院という多くの臨床の皆様のお力を賜ったことが盛会であったことの何よりの理由であったと思います。また、ご参加くださいました会員・非会員を問わず、日赤に関係する諸姉のご協力のご賜物でもあります。ここにまずもお礼申し上げます。

このたびの学術集会のテーマ自体は、あまり日赤色の濃いものではありません。しかし、その内実は、日赤が長い時間をかけ、真摯に努力し、追求し続けてきた臨床看護技術をはじめとする看護の根幹にかかわることへの問題提起でした。ぜひとも皆様で考えていきたいという思いから、可能な限り、講演や対談、シンポジウムと研究発表とが被らないよう配慮しました。そのためか、発表会場は大入り満員で、会場が狭かったかもしれないという反省もあります。しかし、研究発表会場では、顔と顔を突き合わせての充実したディスカッションが展開されており、狭さが逆に功を奏したような感もありました。また、交流集会所もナーシングサイエンス・カフェも、参加者の多さに、うれしいような、会場が狭いのではないかとハラハラドキドキでした。とはいえ、すべてが重ならないようにというわけにはいかず、一部の発表や交流集会所と講演などが同じ時間帯で重なったことについては、皆様からも一考を要するというご意見をいただきました。次回に申し送りしたいと思います。

今回の学術集会の特徴は、何と言っても、じっくり考える機会にすることを狙ったことから、シンプルな企画を目標にしたことです。とはいえ、一点豪華主義、いや実際は三点豪華主義でした。豪華であるだけにすべての企画に金屏風を立てるはめになり、屏風を揃えるという苦労もありました。しかし、さすがに厳選された演者と座長さんのおかげで、主催者側の意図を十二分に把握していただき、すばらしい内容になったと思います。

駒ヶ根高原ホテルでの懇親会は100名以上の参加を得ました。余談ではありますが、女性が多いことから飲み放題はやめたのですが、それだけは後悔しました。皆様のお酒の強さにも舌を巻きました。参加者の皆様は、めったにお目にかかれない内田樹先生や、南・村松両先生、シンポジストの各先生方との記念写真、屈託のない会話があちこちで聞かれ、和やか、かつ賑やかでした。皆様には、突然にごあいさつをお願いしたにもかかわらず、快くユーモアたっぷりにお話しいただき、これもまた感謝でした。

後悔の最たることは、大会長が閉会までおつきあいでできなかったことです。体調管理がうまくいかず、皆様に最後にごあいさつできなかったことは痛恨の極みです。紙面を借りてあらためてお詫び申し上げます。なにはともあれ、学術集会の開催はいいものです。企画するためには現在の看護を点検する必要があります。会場の配置一つをとっても、人間の行動特性や視線など配慮すべきことを考えなくてはなりません。勉強になりますし、楽しくもあり苦しくもある、大きな人生体験の一つというのが実感です。

なにはともあれ、それもこれも、皆さまのご協力があったからこそです。あらためて、心からお礼申し上げます。

## 「第14回日本赤十字看護学会学術集会」開催のご案内

第14回日本赤十字看護学会学術集会大会長  
日本赤十字秋田看護大学 細越 幸子

今年の夏は、随分暑い日が長く続きましたが、木々が美しく色づきはじめ、高い山の初冠雪の報を耳にしますと、確実に季節が移り替わっていることを感じます。皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。

第14回日本赤十字看護学会学術集会開催を予定している2013（平成25）年は、国際赤十字が「戦争で負傷した兵士を敵味方の別なく救護すること」を目的として誕生した時から150年を数えます。

日本赤十字社に於いては、1888（明治21）年に会津磐梯山噴火の際に、世界で最初といわれる災害救護に看護師が参加して以来、戦争や自然災害の発生と同時に、被災者の苦痛をいち早く取り除くために活動を展開して現在に至っております。

昨年の東日本大震災は、未曾有・壊滅という言葉に象徴されるように、さっきまで生活していたはずの家や街並みそして木々や道路が跡形もなくなり、瓦礫の山と化した現場に、いち早く日本赤十字社の医療救護班や看護ケア班そしてこころのケア班が「赤十字旗」のもとに大活躍されました。

このように、発足以来、平時・戦時を問わず「赤十字看護」が展開されてきました。

当学術集会は、救護活動の原点を踏まえるべく「これからの災害看護—東日本大震災と赤十字救護活動—」をメインテーマに開催することといたしました。

内容としては、基調講演を「自然災害（地震・津波）と日本列島の状況について」を野越三雄氏（秋田大学地域創生センター）に、特別講演は「石巻医療圏における東日本大震災への対応」をテーマに石井正氏（東北大学病院地域医療教育支援部）を予定いたしました。

次に、教育講演として、小原真理子氏（日本赤十字看護大学）の「進化する災害看護教育」を予定しているほか、「これからの災害看護を担う人材育成」をテーマとしたシンポジウムを行います。

次に、指定交流会として「避難所・仮設住宅における看護活動」、「赤十字看護ケア班の活動」及び「学生ボランティアの活動」を行うほか「ナイチンゲールを臨床に」をテーマにワークショップなどを予定しております。

また、市民の皆様を対象に公開するシンポジウムを行います。

テーマを「被災家族—支援される立場、支援する立場、その両方から」として、東日本大震災で被災された方々にシンポジストとしてご参加いただきます。

次に、災害図上訓練の一手法であります「DIG」（Disaster（災害）Imagination（想像力）Game（ゲーム）の略）を中学生・高校生を対象として行います。

「DIG」は、地図を用いて災害発生を想定し、図上で危険を予測してその対処方法をグループで導き出すというものです。

さらに、今回は、国際赤十字誕生から150年という大きな節目の年を記念した特別講演を「赤十字の理念とその発展」というテーマで野々山忠致先生（元駐ノルウェー大使、元国際赤十字・赤新月社連盟財政委員）をお願いしております。

当学術集会では、平常時または災害状況の中で行われてきた「赤十字の看護」を振り返り、その「こころと技」を次代にどのように伝えていってよいかを今一度考える機会にしたいと思います。

6月の秋田は、木々の緑がとてもきれいですし、つつじが盛んな季節でございます。夕刻になると、蛙の大合唱が始まります。

多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。



NEWS LETTER The Japanese Red Cross Society of Nursing Science Vol.10, 2012.

日本赤十字看護学会ニュースレター 第10号 2012年12月発行

### ●発行 日本赤十字看護学会 広報委員会

宮城県黒川郡大和町学苑1番地1 宮城大学看護学部原玲子研究室内

### ●学会ニュースレターは学会ホームページからダウンロードできます。

<http://jrcsns.umin.ne.jp>

### ●学会ニュースレターに関する皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。

t-takeuchi@rctoyota.ac.jp

sugiura@rctoyota.ac.jp までお願いします。

### ●編集後記

平成24年度の日本赤十字看護学会のニュースレターをお届けします。今年度は、理事会、評議員会のメンバーが交代をしました。昨年度、本学会は、東日本大震災において多くの支援活動に取り組んできました。今度も、そのエネルギーを引き継ぎながら、復興への中長期的な支援活動等が計画されています。会員の皆さまのご意見をいただきながら、充実したニュースレターとしていきたいと思っております。（原 玲子）